

支那事変初期比支はあけり

十二桶部隊と中んとすの砲兵戦史

資料

大橋武夫(39期)

支那駐屯砲兵連隊中隊長

山砲隊第三連隊副官

N.C.

10x20

1474

内容

事変前の支隊部隊

緒戦

南苑攻撃および宛平城略 (別冊一) つき

南口鎮 (八達嶺入口) 攻撃

九宮城十石橋の戦場到着

正定城攻撃 (別冊二) つき

太原城攻撃 (別冊三) つき

白河庄付近の戦斗 (別冊四) つき

黄河沿河地帯の突破

G.N

10x20

1475

付録

第一

丸云式十只桶の重戦成績報告

第二

砲兵の将来に因する備感

第三

武漢作戦攻略戦における所感

第四

武漢作戦における得たの教訓

第五

支那事変における戦例集

10x20

1476

4
事変前の北支砲兵部隊

(1)
北支に最初いた砲兵は、支那駐屯砲兵隊である。これは北情事変以来北京天津地区に駐屯していた支那駐屯部隊の十部が、天山砲兵隊及び、善通寺の山砲兵第十一連隊より一この隊が一年交代で派遣されたものである。天津、天津の海軍司令部にいたのがある。昭和十年北支方面の情勢緊迫にもない、支那駐屯部隊は某部駐屯司令部に二連隊を基幹とする諸兵連合の支那駐屯軍となり、砲兵部隊も十砲兵中隊、十山砲兵中隊の支那駐屯砲兵

10x20

1477

(2)

連隊に増強され、捜索隊、戦車隊、工兵隊等
 他
 の特科部隊とともに馬津邨外東林局の飛行場
 周辺に駐屯し、その間に在った。飛行場の向
 左側の林の中には、フランス兵がはるかに
 びらた。^{事支那兵} 編制は
 連隊長 鈴木幸道 (28期)
 副官 山成政風 (30期)
 第一中隊長 杉本 〇〇 (28期) 春彦 A 正文 SK
 第二中隊長 八針 幸三 (34期)
 第三中隊長 堅山 忠吉 (38期)

10 x 20

1478

才二 大隊長 少佐 赤松 友次郎 (29期)
 才三 中隊長 大尉 倉橋 其雄 (39期) (初代は倉橋其雄39期)
 才四 中隊長 大尉 有井 正 (34期) (初代は有井正34期)
 才一 大隊長 少佐 善通 孝 (善通孝)
 才二 中隊長 大尉 堀 貞馬 (堀貞馬) 才一中隊長
 才三 中隊長 大尉 編 成 才二大隊長
 自動貸車牽引の三八式十且桶で、才三中隊長は
 2SA、才四中隊長は3SA (若口三島) で編成した
 七

10x20

1479

山砲と十五榴の混成の師団砲兵は我々が年
 平理想とこまきとこまきとで、支那駐屯
 砲兵連隊にありてはじめて實現されたのであ
 る。もちろんだが不十分である。中隊数は
 大隊は三中隊はこまきと、十五榴は牽引自
 動車（キヤタピロー）はこまき、一万メートル
 以上の射程を望む。三人式十五榴は射
 程約四千米²⁴⁰⁰メートルで、時速十キロ以上が走ら
 ば二つに怖れがある。自動砲車であるとい
 うは路外には出られない。しかし人員は連隊

19・20

1480

(前考課本部佐野隊長)以下幹部も精鋭であ
 つた。知は士官予校予科では人力較曳の三八
 式十五榴、士官候補生と新任が討つことの初
 年兵隊首は2SA(三島)が四年式十五榴、
 討時代は7SA(市川)が四式牽引自衛車村
 (時連方キロ)付の十四年式十加、野戦砲兵予
 校では九二式キトニ牽引車(時連十五キロ)
 付の九二式十加と九二式十五榴を扱ひ、
 自衛車予校の二年生も砲工予校と自衛車予校
 の二年生も予校の教育をとり、野戦砲兵予校では

10x20

1481

射撃教官の助手としに鍛えられ、とくに九二
 式~~機銃~~の牽引車、九二式~~機銃~~の牽引車、九二式十加、九二式十加桶
 は実用試験の担当者となり、取扱書などの起
 真もし、互という^高機運に恵まれて、大砲も
 自衛隊もすつかり手に入つていたので、喜ぶ
 常人で、鈴木連隊長の猛訓練を要りついで。
 連隊長は^{日本軍}過吉の戦績あり、この支那の城壁を
 破壊し、あつたは幕をもつて衆を憎むせよ
 には十加桶を絶対必要とし、大砲の破壊力を
 一もつて十に当るべき戦力を探る必要あり

10x20

1482

()

たのびある、
(注終り)

G
N

10 x 20

1483

緒戦

(4)

昭和十二年七月七日北京南郊蘆溝橋付近で
 日支兩軍の衝突ありや、支那駐屯軍は主力
 を豊台付近に集結し、優勢たる支那軍（宗哲
 えの十九軍一約三二師団）の包圍下にあつた
 にもかかわらず、よく二日を持久させ、中央
 部の方針が実行行使と決定するや、機支を制
 して攻撃し、これを永定河南方に撃攘した。
 支那駐屯軍が寡兵よく敵衆敵を制圧しえた
 るは、^將敵の^士士氣が崩れを屈倒して、^兵兵士に
 よるのほどもあるか、^兵兵行動精敏なる

2.5

10x20

碇と威布絶大兵十と桶部隊の幸力による裏付
 けのちりに音敵こそゝるゝ

10 x 20

1485

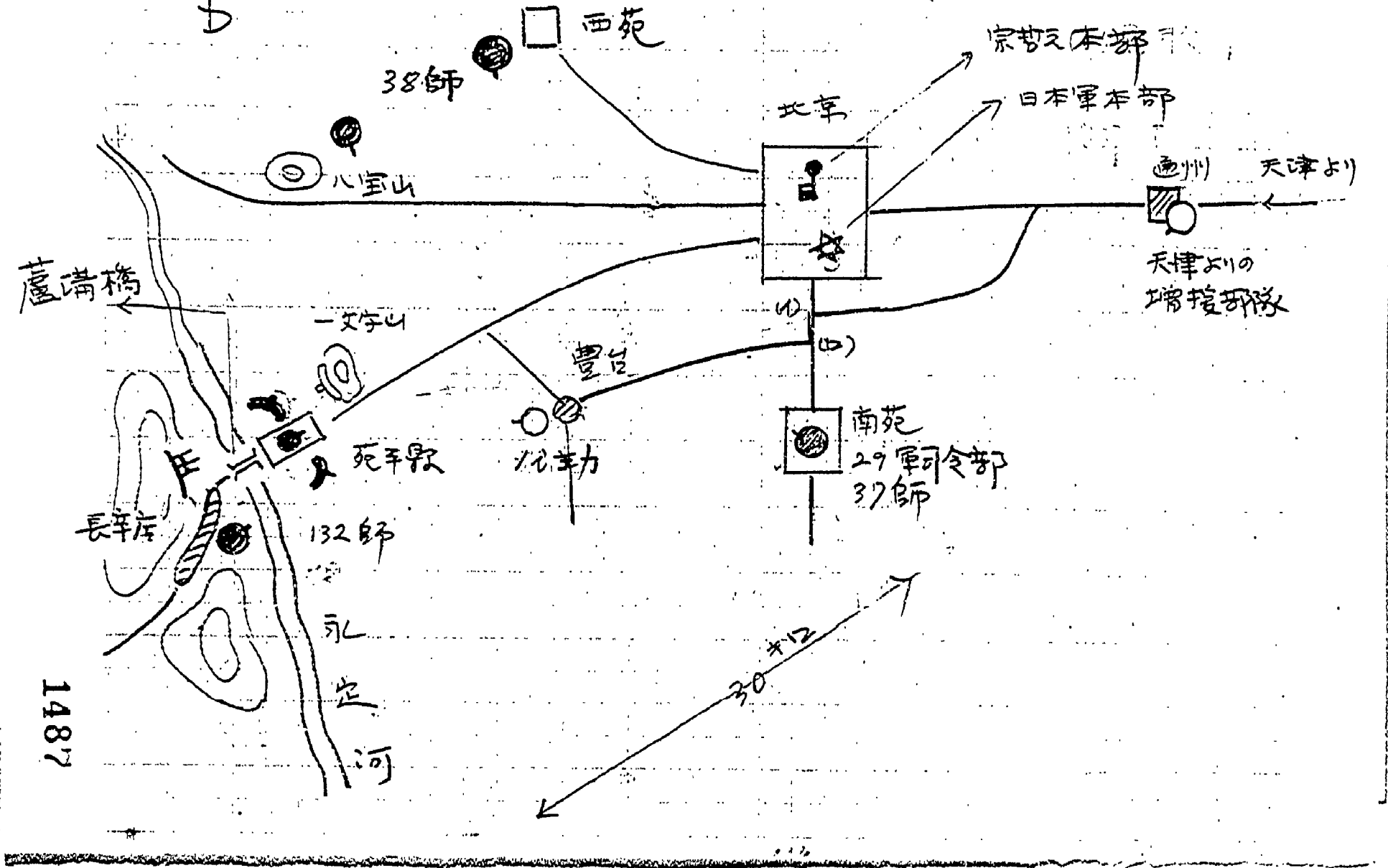
當時此京付にいた日本軍は河内^正五少將
 の指揮する混成旅団で、支那駐屯兵一連
 隊（長牟田口廉也大佐）全歩兵連隊、全投擧
 隊、^直同砲兵連隊（長鈴木率道大佐）を基
 幹とし、國の如く三ヶ師団余の支那軍の包圍
 下にあり、^直ちよつととも氣合を賣けさす
 り、^直直ちに圧殺される事態にあつた。

10x20

1486

北平付近彼我態勢要図

昭和十二年七月十日頃



天津駐屯部隊は七月八日夜半非常呼集を以て
 出動し、急いで出動体制をととのえ、九日十二
 時三十分天津と会合し、天津―北京道に北京
 に向って急進した。全部自動車編成である。十
 日午前三時半通州に集結し、ついで豊台に進
 出した。

10/20

1488



昭和十二年七月九日
 十四時頃、天津―北京
 道で小休止をこころ
 天津部隊（自動車代の
 諸兵連合部隊）、最近
 の人物は孤岡淳吉中尉
 、戦車は八九式戦車

1489
1490



昭和十二年七月九日
十四時頃、天津―改竈
道に於て休止をこころ
天津部隊（自動車化の
諸兵連合部隊）、「最
大の困難に直面する中
に、八月九日、天津

1489
1490

天守 → 北ノ塔

9日

514(2)

261

1491

七月十一日頃

通州から北京城壁を南に迂回して、豊台に
 進出するとき一つの押話がある。蕪岡涼吉中
 尉の指揮する大隊は、自動貨車、教習隊が本隊
 に追及中、道を誤つて、^{豊台から}北京-南苑街道を
 ンスピードで南進した。驚いたのは南苑の
 支那軍である。「すわ！日本軍の攻撃！と
 由かりに、慌てて正内付道の小銃、軽車機を
 乱射した。面喰つたのは蕪岡部隊がある。味
 方の「豊台兵」と思つたところから不意討
 撃を食つたのだからビクビクした。

10x20

下車し、射撃戦に移つたか、そのうちやつ
 と道をまちかえ右の口氣が引揚つたか、
 一三輜の自動車も失つた。事件はこれに
 けのことであるか、この反響はさういふこと
 になつた。これまじ一葉和乎はつとめたりす
 この一市か、東京には南苑の支那軍一カ師
 田か日本軍を不意に撃つと伺わり、南京に
 は日本軍の南苑の支那軍を急襲しと伺
 わつてしまつたのである。これまじ一葉和乎
 はつとめたりすも、これにより、ついに

10.20

1493

3)

文郵員に引取きつ返と、後日私は大奉子の有
 力者から用がされて驚いた。事件というものは
 一、二の事件でも痛感したことであるが、
 事件というものは、水面におきた波紋のよお
 には、現場を離れるほど誇大に吹聴されるもの
 で、その結果、現場の者の思いもよらないよ
 おお大事件が作り出されてこまろ、というこ
 とがある。

注終り

37

印

10*20

1494

七月十九日、ついに我軍は苑平縣縣城の支那軍に^應徹砲撃を加えることになった。前記の事情から、最初の^{一撃}砲撃の全軍を慍伏させ^{せよ}ため、砲兵連隊の^と全火力を投入する^{こと}に^なり、十九日夜全隊をあつて豊呂西南側に陣地を占領した。十五桶大隊の観測所は^敵前より^{マートン}の^下有名な^一支那山、^敵陣地は^三の^後方^午上^百メートルの^西上^尾尾である。

10x20

1495

△-6000
HLL-1500

21

(5)

砲と成り、絶大な十上榴部隊の威力による裏付けが、
 七月二十日の茨平界域に対する膺徳射撃に於ける十上サシの榴弾の忠実な威力には、彼我ともに驚倒し、とくに内野中隊長直接指揮の十上榴一内の敢前者スタートンの一文字山頂(比高約十メートル)の砦丘に進入し、最前の一帯で、^{東北角}樓の一隅の櫓を粉砕した。ここには、完全に砦の度胸をぬいて、圧倒してしまつた。

10 X 20

1496

七月二十日 十四時四十分 射撃開始！
 のを躊躇した。弾著を付けた人か、ま
 ーす！と

10x20

1497

大隊長に声をかけた。平素の射撃習性とい
 うものは怖ろしいもので、射撃演習場で、
 目標付けに人かいるとき射つときはいい、
 という観念が頭にこびりついている。二人は
 滑稽な^{言葉}笑いにあつたのである。大隊長も、半
 田にさうな隊長と同じ気持ちがあつたとみえ、
 おかしいことは次々とお伺ひをたてられし
 く、結局河辺祐四の鈴木参謀から「東京の大
 本営も承知をかり撃つ！」という電話の返事
 がある。ついでに利は「指令をより射つ！」と

つたよあび

10x20

士官候も補生以来、何度となくかけつけ令
 を、~~支那~~に實戦にありて使つてこまつた。訓
 練演習をやつたとあり、すぐや一弾は発射さ
 した。これが支那市街、大東亞戦争を通じて
 の最初の破弾である。
 演習のとおり弾丸ほとんどいつた。演習と
 違つるところは、弾著点付近にりたる百人以上の
 支那兵が、一瞬の間に吹つたやんごしまつた
 ことである。そこで観測所の付近にカーフと
 夕立のよおな音かして、一面に破弾の破片が

くりかえしてきしん射撃

10x2

とんびきた。考えて千石ら自命の破弾の破片
 がある。前前なるマートン法に観測所を
 したのであまからこいば当然なことである。
 破壊をほつていなかつたら大変化ことになる
 ところであつた。
 三八式とけいこ十石幅十石幅である。そ
 れに弾丸は最新式の九二式榴弾だから威力は
 四年九十石幅と等しい。装薬は手加減で
 調整してやつけたのか、案外精度がよい
 。十石幅八内の装薬量と等しくて、装薬量

10/20

出たりまぢ改煙に包まぬこゝきつた。城壁の
 上に華火つゝたあ山ほど伏山並んでゐた傲慢
 な敵の機關銃はどゝ之行つたか、一發も撃ち
 返さぬ二挺の。左に^向向うの長辛店の高地か
 ら、敵の野砲隊がと人びきた。あかしは二と
 には、敵の砲隊かくるといふことは、二のと
 きまが全知考えなかつた。こゝにはちまたと！
 驚き、幾原がらあかしくたつたが、慚く立直
 つつ野砲兵戦らしきものを始めた。改煙を
 左よりには探りぞうつのがあゝか、野砲兵

10x20

1501

戦は氣力の戦いであるしといふことを、しめ
 して示した。この頃結局我の氣力勝ちになり
 、敵砲兵は沈黙し、戦勝我の意をとり、
 第一線の各部隊から一番に我陣かたのこ人び
 きた。今までの鬱憤が一度に吹きとんとことい
 うのである。

午後五時、大隊長は内野中隊長に一門を一文
 文山上に推進すべしと命令した。中隊長直接
 指揮のもとに20-30人の人が鞍馬が山上へま
 はた高知マートン山かりの山に火砲をひ

10

G.N

10x20

まあが、午後七時（内地の午後六時）夏た
 かうまが明る（敵の機関銃の構えを制し、
 昭華美前方！）東北角城壁上に登る城櫓め
 かけて「ヤー」を飛ばし、二番砲手が「照準
 美し！」と頓驚（素）た声をやりあげた。初弾が
 櫓に命中し、一発が粉砕し、まうたのであ
 る。正門上の大櫓は私が始ました。
 二の日の砲撃は阪外新聞記者（固）や外各団（或）
 官の眼の前で行なわれたので、翌朝、反那側
 新聞にはさつそく「日軍砲兵、威力強大、破

N.G.

10x20

1503

壞力熾烈、不堪現目しと、古き古き入り
が報導よさした。この一撃は友那軍に古きを衛
撃と与え、古に違ひなく、敵中に孤立する我軍
に對し、その後ピタリと手出しをしなくたつ
てしまつた。作終り

10 X 20

1504



昭和十二年七月二十日
 廣徳射撃後の
 苑子殿正門(北門)
 城壁上の構図は十二日福澤に



粉砕したる
 石もす

210

10x20

1505
 1506

~~1492~~
~~1493~~



昭和十二年七月二十日
廣徳(船野)後の
苑子殿正門(北門)
城壁上の標高五十二尺餘に

折破さしつ影もさし



1505
1506

~~1494~~
~~1494~~

事部事支で砲撃の一発を放つたのは支那駐
 屯砲兵連隊の十五榴である。一撃で蘆溝橋
 (実は苑平穀城)を撃破した^{この}十五榴部隊はそ
 の後も^言に^より^働いた。大砲に威力があり、
 部隊が^{平時}より予想戦場^に駐屯して短訓練を
 施した現役^の精銳があつたからである。

N.G

10x20

(6)

この時の十五桶の中隊長は左記のとおり
 六三中队長 ^{大藤} 七橋光五 (少期)
 六四中队長 大野真利 (少期)
 三八式十桶は旧式ではあるが、堅牢で、
 自動装車でききまめこのも二つは、弾丸は
 新式のもので流用したが、威力は四年式十
 桶と全なごあつた。射程約四千という短射
 程は欠点があつたが、此等の戦場では、使
 用さるよけは、これが十分固にあつた。
 東部戦場における重要課題は城壁の破壊と

10 x 20

南苑以撃およぶ苑平野以略

七月二十八日拂曉より

支那駐屯軍が主力をもちて南苑を攻撃す

攻撃中、苑平野の敵に討つては捜索隊へ軽装

甲車輜を主体とすを一文字山付近に配置し

2 監視させしむたが、七月二十八日午後三時頃捜索

隊危うしといふ急使が来た。まづまが自動

車砲兵かひとで行け！しといふことぞ、我々

支那駐屯次兵連隊が大隊は汗を拭ういと

まもなく豊台へ引き返し、町を去るところぞ

一発の祈しありし、一文字山を駆けつけ

10 x 20

1509

捜索隊は大方死傷を蒙りて夜よがたなが、

た。一、文よ山はまた我が手にあつた。さつき
の一發は彼我の士氣に大きな影響を与へた。標
標が、もお大丈夫である。

七月~~二十~~^{二十九}日、駐屯軍は茨平畷域を~~攻~~^{非格}に攻

略するにことに決した。

支那戦場における重要な課題は、城壁の破

壊と城壁内の敵とくに迫撃砲の處理である。

この件につりては日本軍は過^過去にありて甚い

經驗をなめこめるので、我々は準備を急らな

かつた。支那駐屯兵連隊にはかく十五編

10x20

1510

つとりあえがは旧式でもかきめあいに無理
 矢理に甚薄し、特別の訓練をこころき反のもえ
 の巨めである。

七月二十九日の苑平界域攻撃における三八
 式十と福は平素の期待に合点よくよく威力
 を發揮し、城内の迫撃砲を完全に制圧すべ
 とともに、~~日本軍~~は始めの城壁に射
 撃路用銃の破壊射撃に成功した。その
 詳細は別紙のとおりである。左右後日十月に
 行方不明正庄域に對して九三式十と福が行な

10-29

1511

つたものにくらぶると、奥行きか、博のほう、
 弾丸初速に大きき差があるため、やむを
 成りこたがある。

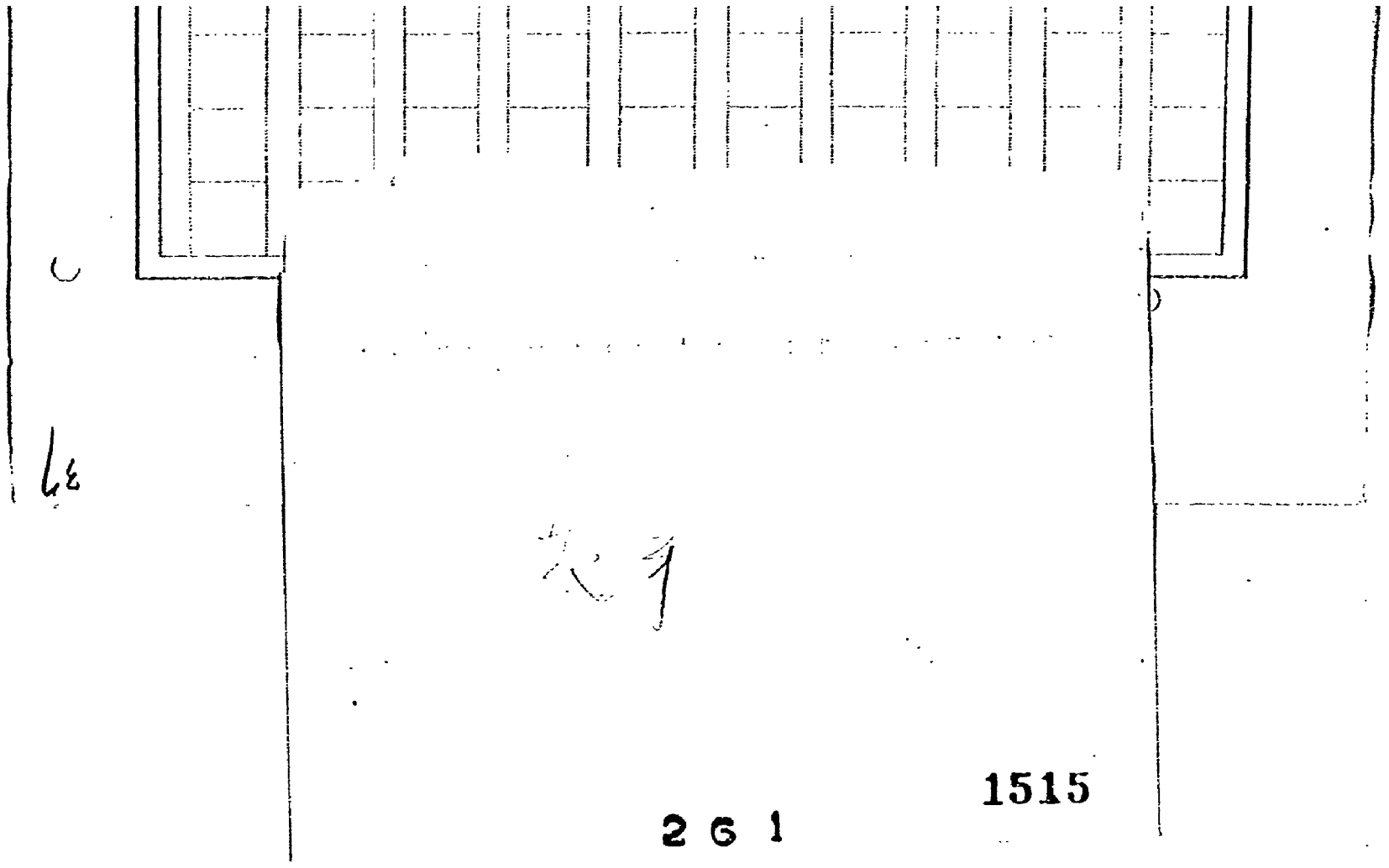
10×20

1512



昭和十二年七月二十九日
菅蘆浦橋
茨子野城の破壊
式十五福の撃に上つて
27 きた石老撃路
梯子は城内に降りる
ためのもの

1513
1514



261

1515

(2)

物加 飛江 成物 ことり 3

別冊

蘆溝橋城壁破壊射撃に関する調査

ま
し
ん
ち

1

8

29

南の
鎮の
八達
山領
入に

10-20

1517

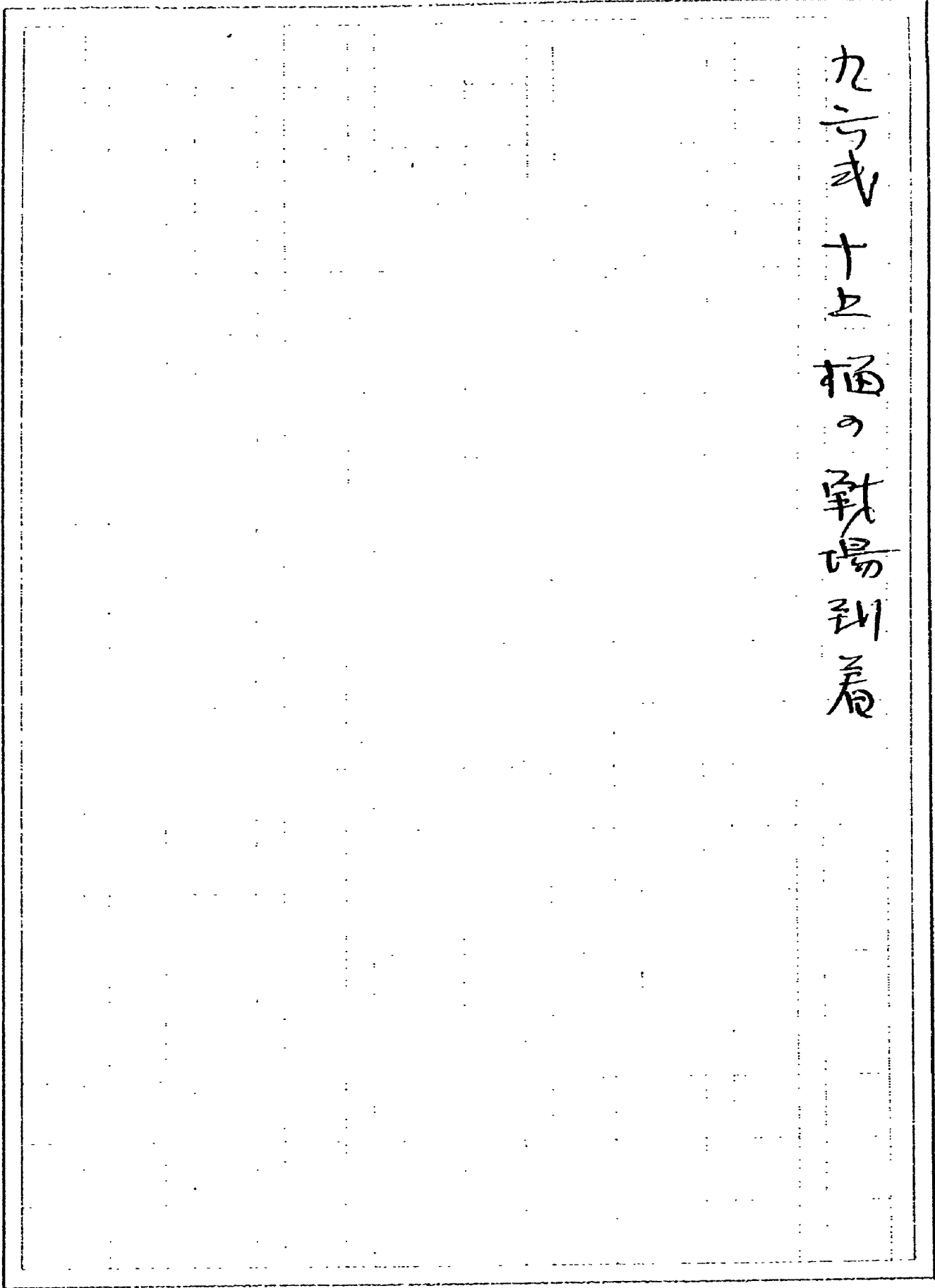
(甲)

(8)

北京天津地間の鉄道を掃蕩して日本軍は八月
 十日日清線、北京西方面、内蒙古に達する八
 達嶺の峡谷、居庸関の隘路に上る敵軍の勢を
 抑止した。
 このときには鉄道の支那駐屯軍のほかに
 坂城の九SA中隊、十月十日桶川中隊、
 順義軍重砲連隊の九中隊(39期)が
 河村秀人大尉が参加し、短射程に苦しみ
 十月三十一日桶川中隊が
 桶川中隊が

10x20

1518



N · G

10 x 20

1519

42

38 欠 別

(9)

八月十一日
 八達嶺を越えて行くが、師団を見送つて、
 地味に引きかえして、我々三八式十五榴弾隊
 は、二二二の藪ちつき大砲と別々の二二二に
 なつた。新鏡の九六式十五榴弾がタニクーに揚
 陸さぬが、らである。
 タニクーの波止場に横付けさした輸送
 船。是れは降ろすき、は中島英少佐(29期)が
 砲校釘導連隊が七中隊長で、九六式十五榴
 九二式十五榴牽引車の運用試験主任と、坂口
 匡隆(木部)の35期、九六式十五榴設計者)であ
 る。

少佐

G.N

10x20

1520

がかつて君臨して、北京総領事署の東庭

(10)

了。大砲の立征を殺つてついでにきてらぬ左の
 のある。クレーンであらさぬ左大砲を見れば
 、新加坡隊員とこの軍用銃をこた No 1 かう
 No 4 と、その後の新製する No 5 - No 8 までのあ
 る。新は番定に雨^今し左思いである。大砲も
 牽引車も私が度々彼をこつとめたもので、十
 分使ひ二台こゝある。必勝の自信は自ら湧き
 出し、月十日^キタ^クの列車で牽引車と大砲を北京に運
 び、北京の假兵舎で新装飾をおこした後、宗哲^え
 田中^の廣場を構めて、言はよく御いて

10 x 20

1521

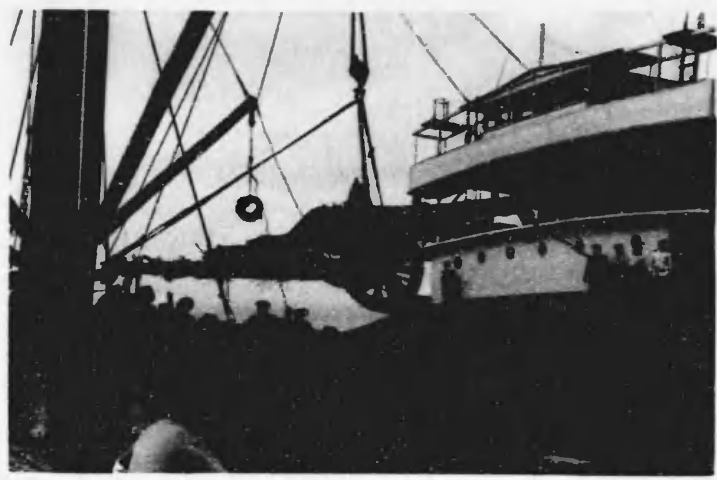
(14)

くれに三八式十挺桶をたらへ、隊員全員整列
 の上、君が代、捧げ銃で訣別をした。彼らと
 兵器廠の倉庫にあしることはまことにしつこ
 くに二ろび、立戻りの中島、^現坂口両少佐も
 感慨深かゆであつた。戦う者の持異な気持ち
 とき眼のあたりみて、感慨深かゆであつた。

10x20

1522

45



タンク-搬上場

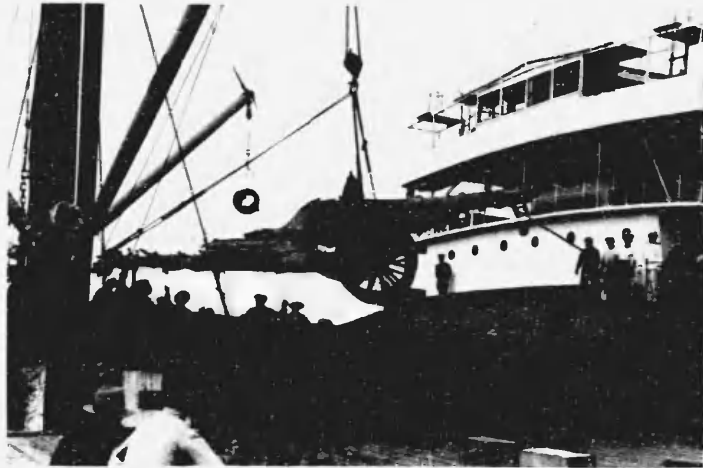
昭和十二年
九月
下旬
夕
ク
ー
捲
込
フ
ッ
ク
九
号
式
十
五
号



タンク-停車場

Z.C.

1523
1524



ターク-搬止場



ターク-停車場

昭
和
十
二
年
八
月
下
旬
冬
ク
ー
機
に
つ
い
て
九
式
十
五
福

1523
1524



北京總政公署東庭における三八式十車との識別
(昭和十二年九月)

10×20

1525
1526



北
 平
 兵
 隊
 二
 一
 三
 東
 庭
 に
 お
 け
 る
 三
 式
 十
 五
 松
 の
 証
 刷
 (

1525
1526

